

企画名：装い／社会／身体：フィールドワーカーによる通文化比較研究

企画責任者：宮脇千絵（南山大学人類学研究所）

アドバイザー：風戸真理（北星学園大学短期大学部）

日時：平成 28 年 1 月 10 日（日曜日）午前／午後 12 時 50 分より午前／午後 19 時 10 分

場所：AA 研 306 室等

プログラム：

12：50 山越康裕（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所） 開会挨拶

宮脇千絵（南山大学人類学研究所） 趣旨説明

13：00 セッション 1

宮脇千絵（南山大学人類学研究所）

「求められる規範と見出される美しさ：中国雲南省モンの衣装の変化から」

本発表では、モン女性の婚姻衣装を事例として民族衣装とは何かを考察した。モン女性が婚礼時に「モンの衣装を着なければならない」とされること、一方で婚礼衣装が年々ファッショナブルになっていることを指摘し、求められ変化しない規範と、そこに見出される美しさとのバランスによってモンの民族衣装が成り立っていることを示した。これは、「変化する」民族衣装の変化の仕方が、規範と審美性のあいだにずれがあることを明らかにしたものである。

野中葉（慶應義塾大学 SFC 研究所）

「信じること／装うこと／隠すこと：インドネシアのムスリムのヴェールとファッション」

本発表は、現代イスラーム教徒の女性たちのヴェールやムスリム服着用の様子、変遷を描くことで、彼女たちにとってのヴェールやムスリム服着用の意味、また現代インドネシアのイスラーム化の一端を明らかにするものであった。ムスリムのヴェールに関する先行研究は多数蓄積があるものの、本発表ではクルアーンにおけるヴェールの規定が、政府の経済的援助をバックアップにしたムスリム・ファッションの展開によって、若い女性たちに新たに解釈され、着用されていることを示した。

討論者：西井涼子（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

14：20 休憩

14：40 セッション 2

大石侑香（首都大学東京大学院人文科学研究科）

「毛皮になった動物たち：ハンティの動物観と毛皮の着用に関する考察」

本発表では、西シベリアに居住するハンティの動物観と毛皮衣類に対する価値観、態度の差異と一致、および生きた動物が毛皮衣類になるまでの過程にともなう人の態度の変動を、文献と現地調査データから考察した。ハンティは魚皮、イラクサ織物の他、野生動物（クズリ、キツネ、テン、カワウソ等）や家畜（トナカイ）の毛や皮を衣類として利用してきた。肉と霊を離し、儀礼によって霊を返した時点で、毛皮も肉のように利用可能な資

源としてのモノとなる。しかし、動物によって毛皮になることによって財産としての価値が下がる、神聖性が継続するなどの違いがみられることが示された。

彭宇潔（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

『女性のファッション』：ピグミー系狩猟採集民バカのイレズミ実践

本発表では、カメルーンにおけるバカ・ピグミーのイレズミが「女性のファッション」としてみなされる経緯を施術の場面から考察した。バカ・ピグミーのイレズミの施術は予告なしに突然始まり、その場にいる者たちが真似をすること、施術の際に鏡を用いないことや自分の身体にある古いイレズミに頓着しないという特徴がある。また男性もイレズミを施すが、女性のほうが親密な関係に基づいて施術をおこなっており、集団性が高い。ここから、イレズミという行為が一時的であり、他人との共有を重視すること、相反して結果としてそれがアイデンティティの表出となることが明らかにされた。

討論者：山本芳美（都留文科大学）

16：00 休憩

16：20 セッション3

中村香子（京都大学アフリカ地域研究資料センター）

「牧畜民サンプルの肌とビーズの距離」

本発表ではケニアに居住するサンプルの身体装飾の意味の変容を「肌との距離」という観点から考察した。サンプルの男女は年齢体系に沿ったビーズによる身体装飾をおこなっているが、近年ビーズ装飾の意味と実践が変容している。同時に、身体変工も多くが急速に衰退するなか、女子割礼のみ新たな意味を帯びながら多様に実施されている。西欧的現代世界と接しながら、自らのポジションを身体装飾によって表現するサンプルについて報告された。

風戸真理（北星学園大学短期大学部）

「継承し、リフォームしながら装うアクセサリ：モンゴル国の銀製品」

本発表ではモンゴルにおける銀製装身具の使用を、メンテナンスの方法に注目して検討した。モンゴルでは男女ともに4~5種類の銀製装身具を持ち、形、サイズ、デザインを変えたり、つや出しや修理をしながら受け継いでいる。モンゴルの銀製装身具は、文化内で地位の表明、超自然的存在との関係と結びついていると同時に、リフォームの際には中国製の型とカタログを使用することから、東アジアのファッションとの繋がりもあることが指摘された。

討論者：中尾世治（南山大学大学院人間文化研究科）

17：40 休憩

18：00 総合討論

討論者：田中雅一（京都大学）

関本照夫（東京大学）

19：00 風戸真理（北星学園大学短期大学部） 閉会辞

実施報告：

本企画は、「装い」の研究領域の多様さを示し、新たな装いの文化論の構築を目指すこと、それを長期にわたり文化の内的論理の把握に努めてきたフィールドワーカーがおこなってきた民族誌的調査の成果を通じて議論することを目的に開催された。アイヒャーは Dress を、視覚で感知するものだけでなく、身体への味、香り、音、感情といった感覚の改変 (body modifications) と、衣服、宝石、装身具などの補完 (body supplements) をも含むとしている (Eicher1995)。つまり、単に衣服だけでなく、人が文化・社会的規範に則って身体上に表現していることすべてを装いと捉える視点である。本企画は、この Dress を身体装飾や身体加工も含めた「装い」として取り扱うことから出発した。

文化人類学における装いや布に関する先行研究では、グローバリゼーションの影響、社会関係に埋め込まれるモノとしての布、あるいは観光化による再生産やその真正性などの側面から語られてきた。これらを踏まえ、いわゆる布もの以外も装いの射程に入れることで、身体にほどこされたさまざまな装飾や加工を同じ地平で語ることを可能にし、また個別の素材 (布、銀、毛皮など) の持つ特性を乗り越え新たな論点を提示できることが期待される。本企画では、銀やガラスの装飾品、毛皮やヴェールなどの装具、イレズミや割礼といった身体変工を扱うことで、装いの視野を広げ、新たに定義づけることを目指した。

セッション 1 では、文化的・宗教的規範に則った装いと、着用者がそこに見出す美意識の一致／不一致が、装いに与える影響や変化について考察した。討論者である西井涼子からは、見せる身体 (宮脇) と隠す身体 (野中) を中心にコメントがなされた。その際に誰に向けて装うのかという点が論点となり、外向けには「美しさ」を、内向けには伝統や規範、ハビトゥスなどが重視されることが指摘された。宮脇発表に対しては、モンらしさが服の組み合わせに残っているなら、何が守られ、その特徴がどこにあるのか、および北タイにおけるモンの布製土産物と比較し、雲南省での既製服の消費者、流通先に関して質問がされた。野中発表に対して、一枚岩的に語られるインドネシアのムスリムにも、様々なエスニック・グループがあることに補足が求められた。それに対し宮脇は、服の組み合わせとともに「それを着る」ことにモンらしさが保たれていること、雲南省では国外のモン、地元のモンがこれまでの主な消費者であったが、現在は漢族からの需要も増えているとの返答をした。野中は、政府の資金的後押しによってインドネシア各地出身のデザイナーが伝統の染織・繊維産業と融合して新たな服を生み出すが、ヴェールは作られていないこと、一方で伝統的な服に対するイスラーム的な規範に啓蒙され、ジャワ族の結婚衣装クバヤがイスラーム的になっていることを示した。

セッション 2 では、動物が魂と肉に分離され、毛皮という衣服になる過程、未加工の肌 to イレズミという装飾をほどこす過程から、装うものがいかに生成されるのかを検討すると同時に、装いからジェンダーの差異が生成されていることを考察した。討論者である山本芳美からは、現代日本社会と自分の研究成果をいかに接続させるのか、その重要性につ

いて指摘された。その上で、大石発表に対して、日本における狩猟との比較の点から動物保護とどのように絡んでくるのか、あるいは毛皮の素材としての加工のしやすさや、希少的価値などに関して質問された。彭発表に対して、世界各地のイレズミ文化との比較の視点、およびバカ・ピグミーのイレズミを通じたアイデンティティがどのくらいの歴史的な幅で捉えることができるのかという点が指摘された。例えば台湾では、原住民の顔のイレズミは日本統治時代に禁止されたが、現代ではTシャツやかばんのデザインとしてイレズミが表現されているという。それに対して大石からは、調査地が自然公園に指定されており、ハンティにはその使用権があること、渡り鳥である白鳥に関しては捕獲制限があること、高値で取引されるミンクやクロテン、カワウソも自家消費程度にしか捕獲しないとの返答であった。また彭からは、いつからイレズミをしていたのか歴史を遡ることは難しいと回答された。また先住民運動を盛んにおこなっているブッシュマンと比較して、外部の影響はあまり受けず、イレズミ実践は「一緒に楽しむ」、「時間を共有する」意識のもとおこなわれていることが強調された。

セッション 3 では、これまで衣服の付属品として看過されてきた装飾（品）に焦点を当て、そこにみられる文化的意味が身体や社会といかに関わり、装いを形成しているのかを考察した。討論者の中尾世治からは、中村発表に対しては、ビーズという見える身体装飾と、割礼という見えない身体変工を装いという同じ土俵で比較することで新たな論点が生まれることが指摘された。女子割礼の内部の多様な実践と、外部に対する単一な表象にずれがあること、それと比較してビーズ装飾の変容も同じような傾向を示しているのかという点が問われた。風戸発表に対しては、銀が多様な側面を持つもののモンゴルでは身近な存在であり、銀製品の位置づけそのものには長らく大きな変更がないこと、他方で種類やデザインが多様化する契機が常に内在化していることが指摘された。その上で、中国の型とカタログの影響力の大きさと、リフォームされやすいもの、されにくいものがあるのかという疑問が出され、デザインの具体的な変化を詳細に追うことの重要性が指摘された。

総合討論では、まず田中雅一からコメントがなされた。モノの 2 つの秩序として、部分がつぎの部分を決めて全体のコーディネートが決まる換喩的秩序、無限にある個体からいかにひとつを選ぶのかという隠喩的秩序が挙げられた。そして、①換喩的アプローチとして共感的な装い、②隠喩的アプローチとして「似合う」身体という問い、③行為遂行的実践として装いによる身体への働きかけ、という論点を示された。

続いて関本照夫からは、装う主体と、そこに表象される装いそのもの、さらに装うという行為の 3 点が確認された。特に、彭発表の「なぜイレズミをするのかという質問ははぐらかされて、やりたいからやっている」という事例で示されたように、装いの根源には、装いをつくりあげる行為に関する世界があるのではないかと指摘された。同時に、装う裸の人間を探して、意思と主体と表現することを探すことが限界にきているように思われ、それよりも、装いという行為がいかに関面白がってなされているのかという点に焦点を当てることに意義があることが指摘された。

その後、質疑応答がフロアにも開かれ、主に次の 2 点に議論が集中した。ひとつは日本人の身体観である。日本では平安時代くらいから着物によって人物特徴を表現するようになり、日本人には身体や顔がないという観念が現代まで続いているのではないか。あるいは今回の会では身体よりも装いの話が多く、肉体そのものについてはほとんど語られなかった。装いの話になると女性が多くなるが、男性のボディビルディングなど肉体そのものへの視点、あるいはかつらといった装いへの視点も必要ではないかという指摘がなされた。

もうひとつは、似合う／似合わない、顔がいい／悪い、美しい／美しくない等の価値基準の文化間比較である。モンゴルでは美人か美人ではないかとは言わないが、服が良い悪いに関してはよく言及される（風戸）。毛皮の扱いが生死に直結する環境と、屋外労働のジェンダー分業があまりないなか、毛皮の扱うのが上手い人、服をきれいに作れる女性がもてる（大石）。サンプルではハンサム、美人はいないが、肌の黒さに白い歯が目立つとよい、立ち姿にもこだわる（中村）。ムスリムの場合はアラブを手本に似合う、似合わないと言われ、インドネシアでは花や鳥の原色が美しいと言われる一方で、シリアでは太陽よりも月が褒め言葉にあり、沙漠地帯での夜の世界に美しさがある。そのため、イスラーム的規範だけでなく、その文化や気候で美しさの基準も変わるのではないか（野中）、といった話が挙げられた。

そして閉会のあいさつでは今後の課題として、①装われるもののマテリアルカルチャー的な研究、②装う行為の共感的、社会的観点からの研究、そして何より③装うこと全般について語り続けること、が挙げられた。このワークショップを通じて得られた新たな交流と知見を、今後の共同研究等へと発展させていきたいと考える。

※当報告の内容は、それぞれの著作の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.